

---

# 神威訓練生第 1 3 班

真田 蟲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神威訓練生第13班

### 【Nコード】

N3794BA

### 【作者名】

真田蟲

### 【あらすじ】

38年前、突如世界中に出現した人を襲い食らう化物マンイーター、通称ME。そして彼等に対抗する能力をもった人間たちは、彼等に奪われた土地を取り返すため、また、数を減らすための間引きを行うために戦うことを義務付けられている。日本では彼らのことを“神威”と呼んでいた。

これは、神威養成学校に入学させられた主人公の鳥飼と、運命を共にする班員達との記録である。

## プロローグ

「……………面倒くせえ」

今日これからの予定を思うと、俺は溜息をもらした。

この神威養成学校に入学してから半年。

正確には入学したというよりも収容されたというべきか。

簡単な基礎知識を叩きこまれ、今日は初めての実戦授業となる。

「ああ、ほんと……………面倒くせえ」

恐怖も興奮も特に感じられない。

別に死んだからといって特にこの世に未練もないつまらない俺だ。

いい成績をあげて目立ちたいなどという虚栄心もない。

それに、何の根拠もない……………というわけでもないのだが俺は死なないという妙な自信があった。

だから面倒くさいというのは、単に体を動かすのがかかったりとかそういう感じに近いかもしれない。

そう、俺は単に、今日確実に誰かが死ぬという事実による人間関係が面倒くさかった。

## プロローグ

世界人口が60〜70億人もいたのは今は昔。

38年前に世界中に出現した異形の化け物に多くの人間が食い殺された。

他の動物には目もくれず、人間ばかりを狙って食べる様から名付けられた名前が“マンイーター”略してME。

当初よりもましにはなったものの、今や世界人口は20億人と言われている。かつての三分の一だ。

それまでの通常兵器があまり通用しないMEに、人間側は最初の数年はやられてばかりであった。

なんせ銃もミサイルも牽制程度にしか効かないのだ。

しかも長時間MEの近くにいと、精神崩壊を起こしてしまうという厄介さ。

空を飛ぶ種類のMEが少ないのが不幸中の幸いか。

自衛隊や軍の活躍で、各国はバリケードを張って居住区から化け物たちを追い出すことに成功する。

だがそれまでの間に抵抗する力も持たない発展途上国はことごとくが蹂躪されてしまった。

今や国としての機能が残っているところは20カ国ほどしかない。

しかもバリケードを築いたといっても一時的に凌いでいるにすぎない。

人間側の劣勢は明らかだった。

人類共通の敵が現れたことで、それまでであった国同士の戦争や紛争が無くなったのは皮肉と言えば皮肉だが。

時折、バリケードを突破して襲ってくるMEを武力で追い返すことを繰り返す日々。

人類にとってそれはジレンマの連続であった。

だが、やはり科学力は凄いというべきか。

それともこれも人間の適応能力のなせる技と見るか。

「未だにこのスーツには慣れないな」

ぴつたりと身体にフィットする戦闘用スーツに着替える。

SF映画なんかに出てくるようなボディースーツに、胸部を守るアーマーを装着する。

腰部のベルトに対ME用兵装を装着した。

この装備が開発されてから、MEに対する民間人への被害は激減した。

それまでの通常兵器が効果がなかったために、様々な面からのアップローチが試された。

その中で開発されたのがこの対ME兵装。

動きやすく、かつ弾性に優れておりある程度の衝撃を吸収する特殊ボディースーツ。

そして所有者の精神エネルギーを物理的なエネルギーに変換する兵器。

通常弾などの物理攻撃が効かないMEだったが、この精神エネルギーは有効であった。

だが、この兵器自体は訓練次第で誰でも使用ができて問題はそのだけではない。

MEの周囲に長時間いると精神崩壊を起こすのだ。

強制的にPTSDを引き起こされると考えてもらって構わない。

これでは兵がいくらいても足りない。

ただこの事態に対する人間の適応力は、何も技術だけではなかった。

これはもはや進化とも言われている。  
マンイーターに対する精神的な耐性を持つ者が現れたのだ。

それが俺たち“神威”である。

国によっていろいろと呼ばれているけど、日本じゃ神威って呼ばれている。

総人口から考えればその数は200人に一人の割合と少数ではあるが、神威は精神崩壊を起こさないのだ。

そういつた人間を集めた場所の一つがここ、神威養成学校である。

今や人類に対する脅威と戦うという名目のため、適正のある16歳以上の者は強制的に集められる。

学校とは名ばかりの、それは無理やり戦うことを義務付けられた監獄のようなものだ。

現在は15歳になると検査を受けることが義務となっている。

そこで適正ありと判断されたものは、神威となってマンイーターと戦うことが強制される。

情報操作やプロパガンダで、まるで神威を英雄視する風潮が作られているがそんなものは嘘っぱちだ。

確かに人々の矛盾であり盾である存在だけど、数は圧倒的に少ない。

いくら頑張ったところでMEの数は減らず、むしろバリケードの向こうでは増える一方だ。

少なくとも、今日死ななくてもいずれ戦場で負けて死ぬことは容易に想像できる。

それまでの夢を否定され、兵士としての人生を歩ませられるのは気分のいいものではないだろう。

中には世間の風潮に染まって誇りだなんだというやつもいるのはいるが。

少なくとも俺は今も現状に満足などできていない立場の人間だ。

……まあ、将来の夢があったかと思われれば無かったと応えるしか

ないんだけどな。

どの道そんな無気力に生きてきた人間に、兵士としての気概を見せるとか言われても土台無理な話である。

それも今日は初めての実戦授業。

バリケードを開門して、壁の向こうでの間引き作戦を実際に行うのだ。

この訓練生が行う初めての実戦授業は、毎年多くの死者が出ると有名である。

入学してからの半年間、同じ釜の飯を喰らい、同じ訓練を強要されてきた同級生の誰かが死ぬ。

それはあまり人間関係を重要視しない俺からしても、テンションを下げるには十分な事実であった。

訓練場の前にはすでに数台の2トトラックが停まっている。

これから班ごとにトラックに乗って、門のところまで移動するのだ。既に俺の班は、俺以外が全員そろっていたらしく待たせてしまっていた。

「遅いぞ鳥飼訓練生!!」

「すみません」

「……ツチ!! いいから早く整列しろ!!」

というか俺が訓練生の中で一番集合が遅かったらしく、菅谷教官に

どやされた。

俺のやるきのない返事に舌うちをしつつ、教官が早く整列しろと促す。

こういう状況であまり口五月蠅く言うのも躊躇われたのか、それとももはや俺のことは諦めているのか。

どちらかは知らないが菅谷教官はこちらを微妙な表情で睨むだけにとどまった。

俺のやる気のない態度は今に始まったことではないし、諦めているのだろうか？

もしかしたら、俺のことはどうせ今日で死ぬと思っているのかもしれない。

まあ、どう思われていてもどうでもいいんだけどな。

## 1話 ドナドナ

長野県にあるバリケードの門に向かってトラックが走る。

椅子が取り付けられ、人が乗り込めるように改造されている軍用トラック。

その荷台の中で俺たちは揺られながら目的地へと向かっていた。

38年前、最初に日本に現れたマンイーター（ME）達は最北端である北海道に出現した。

簡易バリケードが作られるまでの間に侵攻され、すでに東北には人が住んでいない。

長野県の県境を目安に作られた壁の向こう、東北地方や首都であった東京を含む土地は未だ取り返せてはいない。

俺としては無理だと思っているのだが、国のお偉いさん達はマスメディア上で取り返す日は近いと言っている。

まあ、明らかに一般人に希望を持たせるためのまかせだろうけど。

「頑張れよー！！」

「ファイトー！！」

時折、トラックに向けて外から声援がかけられる。

おそらくこれから戦場に向かう俺たちに励ましの声をかけてくれているのだろう。

だが、妙に場違いな気がして俺たちは誰もそれに反応を返すことはなかった。

1話 ドナドナ

「そんな緊張すんなって、俺がいるから安心しろ」

「別に緊張してなんか……」

「おやおや、強がっちゃってまあ」

「……………」

向い側の椅子に座る三人をぼんやりと眺める。

荷台の中、ちよっとうざい感じに笑顔でいるのが大野准尉だ。

初の実戦ということで今回は班に一人、現役の神威が同行することになっている。

俺たち13班の同行者が彼というわけだ。

年齢は本人に確認していないが、二十歳そこそこだと窺える容姿をしている。

体格も良く、坊主頭と相まって体育会系な雰囲気醸し出している。人は基本的にいいのだろう。

おそらく俺たちの実戦に対する必要以上の緊張を、ある程度緩和させようとしてくれるのだとは思う。

だが正直その妙に馴れ馴れしい笑顔が今はうざったいことこのうえない。

「ですから大丈夫ですって……あつ、そうだ!!」

みんなは装備とか大丈夫か？ 鳥飼は問題ないか？」

「問題ない」

その大野准尉に絡まれているのが、班長を務める祠堂正宗。

180を超える身長を持つているうえにさわやか系のイケメン顔という容姿に恵まれた奴だ。

昔から剣道を習っていたらしく体捌きなどはなかなかのものである。短髪にした黒髪と顔つきから真面目さがにじみ出している。

多少熱血な気があり、正直俺はこいつのことが少し苦手だ。

だが俺と一緒にフォーメーションでは前衛を務めるせいにか、妙にこちらに対して友人ぶっている気がする。

というかまるで相棒扱いされていてちよつと鬱陶しい時もある。

今も他の班員ではなく俺に話題を振ってきたのは、そのせいだろう。普段は熱血なこいつもこつという目上の人間は少し苦手意識があるのだろう。

悪いがそんな助けを求めるような顔をされても、俺はそれに応えてやるつもりはない。

問題ないの一言で切って捨てた俺にまるで見捨てられた子犬のような眼をする祠堂。

……俺は男にそんな目をされて喜ぶような気持ち悪い趣味は持ち合わせちゃいない。

こいつを無視して視線をその隣に移す。

「ええと……山谷はどうだ？」

「も、問題ないツスよ」

「本当か〜?」

「ほ、本当ツス」

祠堂に話題の矛先を向けられて、彼の隣に座っていた少女が少し緊張したかのような声を出す。

大野准尉の言葉にもちゃんと受け答えするも、どもり気味なところから緊張が窺える。

彼女の名前は山谷里香、ポジションは遊撃。

必要に応じて前衛に出たり、後方から支援したりするのが役割だ。

茶色に染めたボブカットの髪型と大きな目が実年齢よりも少し幼い印象を与える。

身長は160程だろうか、女子の平均身長に近い。

語尾に「〜ツス」とつけるのが口癖らしく、普段は比較的明るい性格をしている。

だが上官にあたる人物と一緒にいることと、実戦への緊張感から顔がこわばっていた。

口調からもわかるとおり、中学時代は運動系の部活にいたらしく目上の人間にはめっぼう弱いというか卑屈になるというか。

それでもまだ、おかげで俺と比べればこの縦のつながりの強い組織の中においては順応しているともいえる。

だが何故、自衛隊のような立場である者が髪を染めているのか。

俺と同じく口調に問題があったり、髪の色が許されているのは俺たちが神威だからという理由がある。

自衛隊員とは違い、神威は志望制ではなく強制だ。

自衛隊の指揮下に入るものの、そこらへんの規律は少し緩めで優遇されていた。

一般の自衛隊員と違い、場数を踏み生き残った神威はまるでスター

かアイドルのように持て囃されている者もいる。

国がプロバガンダに利用しているからだ。

そのため、容姿を見栄え良く整えるということもある程度許容されているのだ。

まあ、あまり行きすぎた物は止められるらしいが。

「……………」

視線を向かい側ではなく隣に移す。

俺の隣に座っている、イヤホンをつけて音楽を聴き我関せずの態度をとっているのが小鳥遊雀だ。

こいつも女だが、あまり容姿には頓着していないのか寝ぐせがついている。

その髪も自分で適当に切っているのか、不揃いな感じが否めない。

身長は150もない。女子から見てもかなり小柄な部類だろう。

表情も良く言えばポーカーフェイス、悪く言えば無表情。

おまけに無口とあって、俺はこいつのことを未だにほとんど知らない。

ただ暇な時は今のように音楽プレイヤーで曲を聴いているので、音楽好きなのだろうとは推測しているが。

あと知っていいるのは恐ろしく射撃精度が高いということか。

こいつは俺たちの班で一番射撃が得意だ。いや、班だけではない。

神威養成学校に入学してわずか半年。今や同期生だけではなく三年ある学校内で一番射撃が上手い。

もはやどう考えても天性の才能だろう。

そんな腕前を放置しておく必要性もない。

必然的にこいつはフォーメーションでは後衛からの射撃ポジションを務める。

その自信の表れか、特に緊張した様子も見せずいつも通りの無表情で椅子に座っている。

俺としては……というよりも班員全員がこいつに対しては何も心配していないだろう。

問題はその隣、荷台の一番奥に座ってうつむいている奴だろう。

「……………うっ」

「……………」

長い黒髪と、眉根をよせて下を向く表情が陰気な雰囲気醸し出し出している。

こいつの名前は水瀬命、小鳥遊と同じく後衛のポジションだ。

班の女子の中では160後半と一番背が高い。

にも関わらず、一番の小心者で臆病な性格をしている。

同期生の中で一番実技成績が悪く、どじなのか失敗ばかりを繰り返している班の不安要素だ。

その事が本人の中での臆病さに拍車をかけているのだろう。

時折うめきながら、歯をかちかちと鳴らしている。

戦うことに恐怖を覚えている、典型的な強制されてこの場にいるパターンの人間だ。

誰でも戦闘に関しては死ぬかもしれないという思いから恐怖心がある。

だがこいつの場合はそれが人一倍強い。

正直この班の中で誰が死ぬかと問われれば、一番可能性が高いのは水瀬だと皆思うだろう。

大野准尉を祠堂よりも水瀬の緊張をほぐしてほしいもんだ……まあ、無理だったわけだが。

誰から見ても緊張状態にあるのはわかる。

そんな奴に引率の立場の人間が声をかけないわけがない。

こいつには荷台に乗ってすぐに准尉は何度も話しかけているのだが聞く耳持たずというか、そもそも聞こえていないというか。

何を言っても水瀬は反応を返してこない。

それは准尉に限らず、他の班員が声をかけても同様だ。小鳥遊は声かけすらしていないが。

もはや皆諦めているといってもいい。

とりあえずこちらの足を引っ張らなければ構わない。そういう方向で放置されている。

祠堂はこの現状にあまりいい顔はしていないが、どうすればいいかも解らないのだからどうしようもない。

俺たちはカウンセリングの先生じゃないんだ。

戦うことよりも授業時間を生き残ることに専念すれば、まあ死なないんじゃないか？

水瀬に対してはその程度に考えている。

准尉も同じ考えなのではないだろうか、水瀬を見て少し頬が引きつっている。

できる限り訓練生を死なせないようにしなければならぬ立場としては、水瀬は厄介なやつだろう。

笑顔の下でどういう風に動かすべきか、シミュレーションしているのだと思う。

と、彼の視線がこちらに向いた。

正確には俺と隣に座る小鳥遊を見ている。

「なんすか？」

「お前らは別に緊張してないみたいだな。期待してるぜ？」

まあ“能力持ち”と養成学校始まって以来の天才ガンナがいるんだ。

特に心配はないだろう。おまけに俺もいるしな！」

「あんま期待されても困るんですけどね。」

実際成績はその祠堂の方が良いですよ」

……あんたはおまけかよ、とはつつこまなかった。

期待されすぎても困るというのも、俺の正直な本音ではある。

何より、神威の中でも珍しい「能力持ち」だからといって無駄に頼りにされるのは俺の性に合わなかった。

## 2話 初実戦授業開始

長野県と旧山梨県の県境にあるバリケード。

正式名称「防衛網第七ゲート」の前で俺たちは整列させられていた。神威第13期生の初実戦ということで、門を前にお偉いさんからの有難いお言葉というやつだ。

壇上では現在の防衛庁の長官が、長つたらしい演説をしている。

本人たちにとっては土気高揚のためか何かのつもりか。

はたまた民衆に向けるデモンストレーションか何かの一環か。

ちらほらとテレビ報道のカメラが見えるあたり、後者だと俺は思っている。

同期生の皆は一応真面目に聞いているそぶりを見せてはいるが、その実聞き流しの状態だろう。

皆の頭の中は、初めての实戦をどう生き抜くかということしかない。正直、長官がさつきから口にしてしている日本人の誇りだのなんだのと考えているやつはいないんじゃないかな。

どちらにせよ、これから初めての戦場に出る立場としては長々と立たされてテンションは低い。

俺の背後に並ぶ小鳥遊は、背が小さくて目立たないのをいいことに未だに耳にイヤホンをつけていた。

なかなかいい根性をしているやつである。

## 2話 初実戦授業開始

俺たちのような神威適正者はおよそ2000〜3000人に一人と  
われている。

毎年15歳で適正者と判断されて養成学校に入れられる人数は平均  
400人。

これは決して少ない数字ではない。

だがそのうち三年間の課程を経て訓練校を卒業できるのは半数とい  
う統計が出ている。

これはそのまま半数が死ぬか、もしくは戦闘不可能とされる後遺症  
を残す重症になっていることを意味する。

その多くは実戦授業で死んでしまうのだ。

訓練生の中に顔が強張っているやつが多いのはもつともだろう。

さらに卒業し、現役の神威となればもつと死亡率は増加する。

38年前にMEは出現し、神威の部隊が正式に作られたのが32年  
前。

現在の神威の最高齢が31歳ということを考えれば、いかに死亡率  
が高いかが窺えるというものだ。

実質的な人手不足が発生しているのだ。

では、何故こうまでしてわずか半年という訓練で実践に放り込むの  
か。

それはMEの繁殖速度にある。それこそネズミ算式に数を増やして  
いくのだ。

こうやって定期的に間引き作戦を行わなければ、バリケード周辺の

MEが増えすぎて壁を突破されかねないのだ。  
かつての土地を取り返す、というレベルの話ではない。

油断すればいつ壁の向こうからこちら側へと侵攻してくるかわからない。

そのため、授業と称して訓練生まで間引きをさせられるはめになる。  
こんな調子で「東京奪還の日は近い」などと口にする政治家は馬鹿  
じゃなかるうか。

正直、現実が見えていないとしか言えない言葉だ。

彼等も今のままでは到底無理だと分かっているとしても、否定すること  
が許されない立場なのかもしれないが。

むしろ、無理だということは明白なのにその言葉を信じようとして  
いる一部の民衆の方が愚かに見える気もする。

どちらにせよ、これ以外の選択肢を奪われている俺の現状としては  
どうでもいいことなのだけれど。

死んだら死んだでそれだけのこと。

でもどちらかといえば生きていたい気もする、そんな程度だ。  
生きていたところで将来は訓練と実戦の繰り返しだろう。

情性で生きていくことに、俺はあまり感慨が浮かばなかった。

「第18小隊、構ええ!!」

指揮官の大声に、門の前にいる現役の神威の小隊が対ME兵器を構  
える。

彼等の持っている武器は機関銃タイプとロケットランチャータイプ  
のSAだ。

SAというのは対マンイーターにおける兵装の中で、武器に相当す

るものだ。

正式名称「SPIRIT ARMZ」

所有者の精神エネルギーを物理的な力に変換し、刃や弾丸を形成する兵器。

MEに有効というだけでなく、従来の兵器と違い物理的な弾切れを起こさないという利点もある。

反面、それまでに使用されてきた物にくらべて射程が短いという欠点も存在する。

様々な種類があり、今彼等が構えているのは一発の威力は低いが連射性に優れるSAMシンガン。

そして連射性はあまり優れないものの、一撃の威力が高いSアラチャー。

これらを使用して、開門の瞬間に向こうにいるであろう化け物たちに攻撃を加えるのだ。

これは先制攻撃によるこちらへのMEの流入阻止、およびゲート前の陣営確保を目的としている。

「ゲート、開門せよ」

「了解、ゲート開門!!!」

命令とともに警報が鳴り響き、ゆっくりと門が開かれる。

重厚な鉄の壁の向こうが徐々に見え始め、そこにある瘴気のような重たい空気が流れ込んできた。

開かれた門の向こう、写真や映像で見たあの化け物たちの姿があった。

こちらと目があったかと思った瞬間、飛び付くようにこちらに来ようとするマンイーター！。

「撃てえ!!!」

そいつらに、号令とともに弾丸の嵐が叩きこまれる。高威力の砲弾に吹き飛ばされ、散弾のように撒き散らされるマシンガンのエネルギー弾に蜂の巣にされる。門に密集していたME達を倒しつつ、突撃していく第18小隊の面々。

彼等の任務は、門の向こう側へ訓練生が無事に入れるように門周辺を確保するエスコート係だ。

弾丸をまき散らし、ゲート周辺の化け物どもを掃討していく。

しばらくは射撃音が鳴り響き、砂煙が舞った。

どのくらいの時間が経過しただろうか、おそらく2分と経っていないと思うが。

銃撃音が止んだ。

「続いて訓練生、突入開始!!」

おそらく門周辺の敵をあらかじめ倒したのだろう。

俺たち訓練生が突入する順番が来た。

第1班から順に、引率の准尉達を先頭に門をくぐる。

俺たち13班も各自武装を手にしつつ壁の向こうへと初めて向かった。

門の向こうには様々なME達の死体と、精神力を消耗して疲れた表情をした18小隊の人達がいた。

SAは精神力を弾丸や刃に変換する。

理論上は精神が尽きないかぎり弾切れを起こすことはない。

だが実弾兵器に比べ精神力を消耗し、先のように連射を繰り返せばかなりの疲労が溜まるのが欠点だ。

「第1から第4班は壁に沿って西に、第5から8班は前方方向に南へ。」

第9から第13班は壁に沿って東に進め。  
30分後、その場から各班で展開、周囲の敵を掃討する」

「聞こえたな、俺たちは東に向かうぜ？」

「了解」「」

「……了解」

耳に装着したイヤホンから、指揮官からの全周波に合わせた声が流れる。

それを聞いた大野准尉が俺たちに確認してきた。

祠堂と俺、山谷は一応ちゃんと了解と答える。

小鳥遊は無言でうなずくだけだった。

荷台の中と違い、遅れながらも水瀬も反応を返したことから一応話しは聞こえているらしい。

こっから先はいつまでもぼーっとしてたらいい餌だからな。

准尉を先頭に、俺と祠堂が前衛に出る。

その後を山谷が歩き、さらに後に小鳥遊と水瀬が続く。

進行方向が同じ班と並ぶようにして歩みを進めた。

「二時方向、蜥蜴型13体来るぞ！！」

「くそ、全然前に進めねえな！！」

各班の展開が始まる作戦開始後30分が来るまでの間、他の班と共同でMEを迎撃する。

俺と祠堂も拳銃型のSAハンドガンを構え、目標に向かって連射した。

相手からすれば、餌が自ら自分たちの巣に飛び込んでくれたよ

うなものだ。

特に動きまわらなくとも、わらわらとどこからともなく集まってくる。

今はまだ複数の班で密集陣形を組んでいるから、一人一人の負担は少ない。

だが、適当に撃てばどれかしらの個体に命中するのだ。

初っ端からこれでは、この先が思いやられるというものだろう。

俺たちが来た門がある方向、背後からは来ていないのがせめてもの救いか。

それでも現在俺たちに向かってくる化け物たちは、全方位から囲もうと回り込もうとしてくる。

それを阻止するべく迎撃する訓練生。

周囲にいるのは形から蜥蜴型と呼ばれているものがほとんどのようだ。

どいつもこいつも醜悪な容姿をしている。

蜥蜴型は、四足歩行で地を這うようにして歩くことから蜥蜴と分類されているにすぎない。

鱗に包まれた四本の足で大地を踏みしめながらこちらに歩み寄ってくる。

反面、鱗のついた足と違って胴体に鱗はあらず、そのかわり体中に口がついていた。

首から先はなく、まるで何かに切り取られたかのような断面をさらしている。

最初から資料などで知っていなければ、気持ち悪さから逃げ出す奴もいただろう。

最も数が多く、獣型ほど動きは俊敏ではないので近づくと前に倒すことができれば安全だ。

数ある種類のMEの中でも比較的討伐難易度の低い敵である。

「二時方向、キューブ型20以上が来ます！」

「四時方向からは亜人型です!! 数は……23体!？」

「どんだけいやがんだ、畜生が!!！」

作戦開始から既に15分が経過していた。

未だゲートから300メートルほどしか離れていない。

だが、もはや18小隊の有効射程距離からは離れている。

そちらからの援護は望めない。

彼等もゲート前を死守することで手一杯だからだ。

全部で11ある門のうち、最も敵が手薄と呼ばれている場所での状況だ。

他の門に展開している現役の神威たちは一体どれほどの数を相手にしているというのか。

蜥蜴型以外のMEが現れ始めた。

しかも、蜥蜴型よりも厄介なキューブ型や亜人型だ。

キューブ型はその名の通り、鏡面のようにつるつるな表面をした立方体の姿をしている。

地面から1メートルほどの高さを浮遊し、こちらに襲いかかってくる。

外見は他のやつらと違って大人しいものだが、蜥蜴型よりもずっと危険度は高い。

空中に浮遊していることから重力に縛られない、三次元的な軌道を描いて襲ってくるのだ。

「来るなあ!？」

こちらに迫ろうとする蜥蜴型に向かってSAで攻撃を加えていた時のこと。

視界の端で、素早い動きで銃弾をかいくぐった一体のキューブ型が

一人の訓練生に迫ったのが見えた。  
あれは、9班のメンバーか。  
一瞬で接近したキューブ型は、そいつの前でまるで箱が蓋を開けたかのように中身を晒す。

「……………」

彼は何を目撃したのか。

キューブ型は構造に謎が多い種類であり、内部がどのようなになっているのか解明されていない。

中身があることは確かなのだが、死体が残らないのだ。

そのため、中がどうなっているかなど対峙した本人にしかわからない。

そして、あそこまで接近して生きていた神威は今のところ一人も記録に残っていない。

彼が驚きに目を開いた瞬間、上半身がまるで何かに食われたかのように消失した。

血を噴き、支えるものを失った彼の足は重力に従って地面へと倒れる。

「吉田！？ くそおおおお！！」

「止める、よせえ！！」

おそらく同じ班員だった男が、吉田と呼ばれた訓練生を殺したキューブ型にSAの銃口を向ける。

その行動に、慌てて班員のもう一人の訓練生が止めようと声をかける。

しかしもう遅かった。

キューブ型と銃口を向けた訓練生徒の距離はわずか2メートル。

距離としてはいかに素人であろうと、的を外すような距離ではない。だが、今回はそれが災いした。S Aマシンガンから、緑色のエネルギーの銃弾が吐き出されキューブ型に着弾した……次の瞬間。攻撃を受けたキューブ型が爆発を起こした。

「ぐああ!?」

「ぎゃあああ!?」

これが、キューブ型のM Eの死体が残らない理由である。彼等は攻撃を受けると爆発を起こすのだ。

養成学校の座学で教えられたことは、キューブ型を絶対に5メートル以内近づけさせないこと。

これは、対M E用のボディースーツでも至近距離での爆発には耐えられないからだ。

一気に三人の死者が出てしまい、今まで保っていた陣形が崩れる。そこに亜人型がなだれ込もうとしたが、そこはさすがは先任で現役の神威。

9班に同行している准尉がさかさずその場に入りエネルギーブレイドでM Eを切り刻んだ。

エネルギーブレイドは近接戦用のS Aであり、込める精神力の量によつて刃の長さを変える武器だ。

刃こぼれせず、高い切れ味を維持するためはかなり使い勝手がいい。反面、あくまで刃はエネルギーなのでつばぜり合いなどではない。刀身が透過してしまうからだ。

「陣形を崩すな、立て直せ!」

他の准尉達が、危険度の高いキューブ型を優先的に倒していく。

その場をなんとか持ちこたえるも、こちらの消耗に反して敵は増える一方だ。

一秒ごとに増える敵に、訓練生の悪態の声が聞こえてくる。

「大野准尉、本来こんなにM Eの湧いてくる数が多いもんなんですか？」

「……いや、いくらなんでもこの数は異常だ。

M Eの数は無駄に多いのが基本だが、バリケード付近でここまで多いのはおかしい」

そうなのだ。

これまでの授業の話では、定期的の間引き作戦を行っている以上バリケード付近はM Eの数がまだ少ないはずなのだ。

壁から離れれば離れるほど、その数を増やしていく。

少なくとも作戦開始から約15分。

その時間で一班あたり5人と一人の引率准尉の6人構成の班が、5つ一緒に行動しているのだ。

いくら俺たちが訓練生であっても30人で動いていて、未だ500メートルもゲートから離れていない。

開始30分後に各班で展開する予定地点はゲートから1km地点。本来であればそれが妥当な到達ラインというわけだ。

だがまだ半分も到達できていない。作戦開始当初は、適度な緊張を感じさせながらもどこか余裕のあった准尉達。

しかし今は彼等の表情からも余裕は消え、焦りが出始めていた。

「一時方向、亜人型が4体突っ込んでくるツス!!」

「わかった！ 行くぞ鳥飼!!」

「りょーかい」

全く、予想に反してというか予想通りというべきか。  
面倒くさいことになった。

当初としては初っ端からここまでの苦戦は考えてなかったんだけどな。

山谷の声に祠堂は即座に思考を接近戦に切り替える。

亜人型は様々な種類がいるが、どれも名前からわかるように二足歩  
行の人に近い形状をしている。

他のMEより耐久度が高く、銃ではこうして倒し切れず近づくこと  
になることも多い。

だが他のMEと違って人に近い形状をしているため、動きが人間に  
近いということもある。

そのため、先ほどの准尉がブレードで倒していたように接近戦でも  
他と比べ戦いやすい固体なのだ。

俺と祠堂は腰のホルスターにハンドガンをしまう。

そしてエネルギーブレードを手に持つと、刀身を形成する。

近づいてくる亜人型を睨み、接近されても大丈夫なように構えるの  
であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3794ba/>

---

神威訓練生第13班

2012年1月9日22時52分発行